

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 4 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520086

研究課題名(和文) 精神分析と左翼思想 その接近と断絶をめぐる思想史的研究

研究課題名(英文) Psychoanalysis and Leftism - Studies on their contacts and ruptures in the perspective of History of thoughts

研究代表者

立木 康介 (TSUIKI, KOSUKE)

京都大学・人文科学研究所・准教授

研究者番号：70314250

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：精神分析と左翼思想(マルクス主義思想)はなぜ持続的協調に到達できなかったのかという問いについて、文献と歴史的資料の調査にもとづき、実証的かつ総合的に検証した。1920年代から今日まで、精神分析と左翼思想は何度か接近し、そのつどいわばすれ違ってきた。その歴史を、1920年代から30年代にかけてのドイツ(ベルリン)、および1960年代から70年代にかけてのフランス(とりわけ、1964年に国際組織からの離脱を余儀なくされたラカン派)に焦点を絞り、再構築するとともに、精神分析の医学化の推進を、事実上、左翼思想にたいする防波堤として機能させた米国精神分析の特異なケースを、その歴史的帰結とともに検証した。

研究成果の概要(英文)：Why couldn't psychoanalysis and leftism make a long-lasting relationship? The project was an attempt to answer to this question, in a positive and syncretical way, relying on the literature and historical archives. Indeed psychoanalysis and leftism have had contacts since the 1920s until today, but just have past each other every time. In the project, the very history of these contacts and their loss was constructed, mainly focused on Germany (Berlin) from the 1920s to the 30s and on France (especially the Lacanian school, excluded from the International Association in 1964) from the 1960s to the 70s. Also was studied the singular case of the United States where the medicalization of psychoanalysis had functioned as breakwater in fact (even if not in form) against the leftism ideology, with some particular historical consequences.

研究分野：精神分析

キーワード：精神分析 左翼思想 ラカン 68年5月 マルクシズム マオイズム 国際精神分析協会 ベルリン精神分析インスティテュート

1. 研究開始当初の背景

研究代表者が本研究を着想した理由は主に二つある。まず、2006年から2007年にかけて京都大学教育研究振興財団により派遣されたフランスにおいて、精神療法家資格の法制化の動きにたいする精神分析家たちの抵抗運動を目の辺りにしたこと。この激しい抵抗運動において、しかし、精神分析家の諸団体の足並みはけっして揃わず、いわゆる「ラカン派」の内部でも、ラカンという準拠のほかに、この運動を支える強い思想的バックボーンが欠けているように見えた。他方、代表者が2007年度から2009年度にかけて科学研究費の交付を受けて行った研究「精神分析運動の歴史的展開と今日的意義を啓蒙思想の座標軸上で捉え直す試み」(基盤研究C)が、精神分析を、啓蒙思想の系譜を精神分析と共有する社会主義思想との関係において捉える視点を欠いていたために、不十分な成果しか挙げられなかったこと。そこから、精神分析と社会運動、ひいては左翼思想の関係を集中的に研究する必要性を感じた。

2. 研究の目的

精神分析と左翼思想(マルクシズム的社会思想)はなぜ持続的協調に到達できなかったのか?という問いが、本研究のテーマである。

1920年代から今日まで、精神分析と左翼思想は何度か接近し、そのつどいわばすれ違ってきた。その接近の舞台は、1920年代から1930年代にかけてのドイツ、とりわけベルリンとフランクフルト、および、1960年代から1970年代にかけてのフランスである。これらの時代、これらの地域では、左翼思想の側からの精神分析への接近のみならず、精神分析の側からの左翼思想への歩み寄りも見られた。前者については、1930年代のいわゆる「フランクフルト学派」が最もよく知られており、後者については、ヴィルヘルム・ライヒがしばしばその代表格とみなされる。また、1960年代にフランスで誕生したラカン派精神分析が、左翼知識人や、左翼的活動に身を投じていた若者たちを取りこんで急速に発展してきたこともつとに指摘されている。だが、一時期に多くの実を結んだこれらの接近は、どれひとつとして、けっして持続的な結合には至らなかった。これらの接近はそのつど、内的・外的な理由から挫折するか、尻すぼみになるかしてきたのである。フランクフルト学派の活動はナチスによって踏みにじられ、ライヒは国際精神分析協会から除名され、巨大化したラカン派は空中分解を繰り返しつつ、左翼思想との関係を失っていった。

これらの歴史的事実を前にして、精神分析はなぜ左翼思想と添い遂げられないのかと問わずにはいられない。上述の時代と地

域における精神分析と左翼思想の接近には、もちろん、それぞれに固有の必然性があった。フランクフルト学派は、フロイト理論を狭い意味での精神分析、すなわち臨床活動から切り離しつつ、彼らの「礎石」(ホルクハイマー)となる社会論や文化論をそこから取りだすことができた。ライヒは、フロイト理論とマルクシズムを融合させることによって、ブルジョワジーの精神衛生術になりさがった精神分析をプロレタリア文化へ解放すべきだと考えた。そして、正統派精神分析(国際精神分析協会)から異端者の烙印を押されたラカンは、その圧倒的教養によって精神分析の哲学的射程をアピールすることで、同時代の哲学者や思想家を刺激し続けると同時に、1968年5月の騒擾に代表される反体制運動を個人の内的革命にも結びつけようとする若者たちを吸い寄せることができたのだ。にもかかわらず、精神分析と左翼思想のこうした接近が、上述したようにことごとく挫折ないし消滅に終わってしまったのはなぜなのだろうか。もちろん、これらの挫折や消滅には、そのつど異なる外的要因が見出されるにちがいない。だが、そのことは同時に、精神分析と左翼思想のそれぞれの内部に、本来的に互いを斥け合う何かが宿っているのではないかと問うことを妨げない。少なくとも、これまで引き合いに出してきたパラダイム(フランクフルト学派、ライヒ、ラカン派精神分析)やその他の事例を一貫したパースペクティブから捉えようとするとき、このような問いを立てることは不可欠である。

にもかかわらず、これらの問いの検証は世界的に見ても十分になされておらず、そのため、精神分析と左翼思想の接近についての思想史的評価はいまだ定まっていない。本研究は、西洋思想史上に残されたこの奇妙な空白にたいして、文献と歴史的資料の調査にもとづき、実証的かつ総合的にアプローチすることを目的として出発した。

3. 研究の方法

精神分析と左翼思想の歴史的接近のパラダイムとして、もうひとつ忘れてはならないのは、1920年代から30年代初頭にかけてのベルリンである。これまで、思想史的にはフランクフルト学派ばかりが目目されてきたが、こと精神分析内部での、爾後の発展に与えた影響という点では、ベルリンのほうがはるかに重要である。ウィーン出身のライヒが一時期滞在し、教育分析(精神分析家になるための分析)を受けたベルリン精神分析インスティテュート(BPI)には、「若手セミナー」と呼ばれるグループが存在し、フロイト理論とマルクシズムの融合を試みていた。そのなかで際立った活躍を見せていたのがO・フェニヘルとE・ヤーコブゾーンである。他方、同時期のベルリンには「独立社会主義医師協

会」なる団体も存在し、そこで精力的に活動していたE・ジンメルもまたBPIのスタッフだった。これらの精神分析家たちはすべてユダヤ人であり、やがて亡命を余儀なくされる。彼らが最終的に身を落着けたのは、ライヒと同様、米国だった。

米国は、その意味でも、ドイツ、フランスと並んで、本研究にとって重要な参照枠である。米国において精神分析と左翼思想の接近はほとんど起こらなかったが、その理由を探ることは本研究を発展させるためのいわば補助線となるだろう。その際、特に、米国精神分析をヨーロッパの精神分析から決定的に分かつ「精神分析の医学化」という特徴に注目したい。フロイトからの強い批判をよそに、米国の精神分析家たちは非医師による精神分析の実践を認めなかった（この原則は1980年代まで維持された）。精神医学に囲い込まれた精神分析は、精神医学をいわば「精神分析化」することに成功し、その勢いは1960年代まで続いた。その結果、米国は第二次世界大戦後に世界の精神分析の頂点として君臨し、精神分析は米国の大学教育にも入り込むことができた。だが、1960年代から米国精神医学の「脱精神分析」ムーブメントが始まると、精神分析はたちまち衰退の一途を辿り、1990年代には精神医学教育のプログラムから排除されるに至り、今日、瀕死の状態にある。ところで、米国において精神分析が衰退しはじめた時期は、フランスのラカン派が左翼思想の支持者を取りこんで急速に拡大した時期に重なっている。同様の接近が米国では起こらなかったことを考えると、米国では、精神分析の医学化があたかもヨーロッパにおける精神分析と左翼思想の接近のカウンターパートとなったかのように見える。これはおそらく偶然ではない。戦前のベルリンで、マルクシズムに接近する分析家には「政治的中立性」を押しつけた人々は、フロイトを除いて、主に非医師の精神分析実践に反対する人々だったのである。

以上の点をふまえ、本研究は以下のサブテーマを設定した。

1/ 1930年代のフランクフルトにおける「社会研究」と精神分析の関係を、双方向の影響関係として浮かび上がらせること。「社会研究所」(Th・アドルノ、M・ホルクハイマー、E・フロム、H・マルクーゼ、N・エリアスら)の施設に間借りしていた「フランクフルト精神分析インスティテュート(FPI)」(K・ランダウアー、H・メンクラ)の活動についてはあまり知られておらず、資料の収集が不可欠である。

2/ 1920年代から1930年代のベルリンにおける精神分析のマルクシズムへの接近の諸相を明らかにすること。上述のジンメル、フェニヘル、ヤーコプゾーンらの当時の活動を知ること、本研究の柱のひとつである。ただし、ナチスによるBPIの接収(および精神分

析の「アーリア化」)によって、当時の資料のほとんどが破壊され、もしくは所在不明になっている。これは本研究が避けることのできない困難のひとつだが、BPIの当時の発行物や、そのメンバーらの書簡の一部は入手不能ではない。実際、戦前のドイツ精神分析に光を当てる試みには、1990年代以降すぐれた先行研究も存在しており、適宜それらを参照しつつ進むことができる。

3/ ライヒのケースを吟味すること。ライヒは、その理論や言動の過激さのためばかりでなく、フロイトによって徹底的に黙殺されたという点で特に興味深い。たしかに、「死の欲動」だけでなく、性器的でない性的欲動をもフロイト理論から切り捨ててしまったライヒは、精神分析理論を矮小化した責めを免れないだろう。しかし、国際精神分析協会からのライヒの排除は、それとは別の平面においてなされた。ここでは、ライヒの「イデオロギー」とみなされたものが、その理論より重く見られたのである。ライヒの破門にかんする資料に当たりつつ、このことが精神分析にたいしてもつ意味を考察しなくてはならない。

4/ 「精神分析家の政治的中立」という原則を検証すること。1930年代にドイツ精神分析協会をナチスから救うために導入されたと言われるこの原則は、ライヒの処分の際に持ち出されただけでなく、その後の精神分析の政治的立場に影響を与え続けているように見える。さらに注目すべきなのは、この原則の支持者が、フロイトを除いて、非医師による精神分析実践に反対する立場をとっていたことである。精神分析の「非政治化」と「医学化」の間には、いかなる必然的な関係が見出されるだろうか。

5/ マルクスとマルクシズムにたいするラカンの態度を吟味すること。フロイトと異なり、ラカンはマルクスの読者であり、マルクス理論への言及はラカンの業績全体にわたって鏤められている。にもかかわらず、これらを通覧し、そこからなにかを引き出す試みは、P・ブリュノの2010年の著作『ラカン、マルクスのパサー』を除けば、本国フランスでもまだごくかざられている。そこから、たとえば、ラカンがマルクスの「剰余価値」をもとに編み出した「剰余享楽」の概念への、しばしば目に余る誤解や曲解が生じている。ラカンは剰余享楽の構造が資本主義の成立に先立つと述べているが、そこにおいて前提とされているのが「主体の分裂の解消不能性」というラカンの根源的なテーゼであることは、見落とされがちである。こうした遺漏を補いつつ、「ラカンにおけるマルクス」の総体を描き出すことは、ラカン派精神分析と左翼思想の影響関係を考える上で欠かせない。

6/ ラカン派に吸収された左翼知識人の行動とその軌跡を明らかにすること。1963年に国際精神分析協会から破門されたラカンが、翌年からパリの高等師範学校でセミナー

を再開し、その薫陶を受けた学生らの一部が一時期マオイストとして活動したのち、精神分析の実践家に「(再)転向」したことは知られている。これらの学生にかぎらず、共産党や毛沢東の教えに導かれた自らの反体制思想を、個人の内的革命としての精神分析経験へとシフトさせた人々は多かった。彼らはいかなる理由で精神分析に共鳴し、精神分析のいかなる担い手へと転身したのだろうか。また、左翼思想との彼らの関係は、その後いかなる運命を辿ったのだろうか。

7/ 左翼思想家がラカンから受けた影響、また彼らからラカンに向けられた批判を吟味すること。とりわけ、アルチュセール、ドゥルーズ&ガタリ、デリダ、バディウ、ジジエクに注目しなければならない。前欄にも述べたとおり、精神分析家たちは、これらの哲学者から寄せられた批判に回答することを怠ってきた。しかし、これらの哲学者の理論が精神分析理論から隔たってゆく地点を仔細に検討すれば、精神分析の独自性をかえって明確に浮き彫りにすることもできる。そのなかに、精神分析を左翼思想から本来的に遠ざける要素が見出されるだろうか。とすれば、それはいかなる要素だろうか。

8/ 米国における精神分析の医学化の意義を分析すること。上述したように、米国において、この医学化はヨーロッパにおける精神分析と左翼思想の接近のカウンターパートとなっているように見える。精神分析を介しての、医学的言説と左翼的言説のこの両立不能性は、何を意味するのだろうか。米国の堅固な医学制度に囲い込まれたとき、精神分析がたとえば当時の BPI に存在していたような自由な空気を失い、過剰なエリート主義の道を歩み始めたことはたしかである。しかし、この歩みは同時に、公民権運動を機に米国でも左翼的思想が力をもちはじめた時期(1960年代)に、当時次々と出回るようになった新種のサイコセラピーの波に呑み込まれてゆくのに抵抗する力を、精神分析から奪ったのである。

4. 研究成果

上記のサブテーマに沿って研究を進めるに当たり、資金などのマテリアルな条件、および、関係機関へのアクセス可能性の点で、優先順位をつけざるをえなかった。研究期間内に特に集中して取り組むことができたサブテーマは、主に二つの群に分けられる。一方は、サブテーマ 2, 3, 4, 8 であり、これらについては、米国コロンビア大学が 1960年代および 70年代に行った精神分析家のオーラル・ヒストリー調査の資料に当たることが最も大きな課題となった。これらの資料は、出版され邦訳された唯一のインタビューを除き、本邦ではまったく紹介されることがないが、第二次世界大戦後、米国が世界の精神分析をリードしてゆくトレンドを支えた分析家たちの証言の集成であり、歴史的に一級

の価値をもつ資料コーパスである。にもかかわらず(あるいは、それゆえにこそ) コピー機による複写が禁じられているため、必要なページをすべて転記しなければならない。したがって、研究期間内には、目標とするオーラル・ヒストリーの一部のみを転記し、その内容を整理するところまでしか到達できなかったが、これらの資料については今後も解析を続け、いずれまとまった成果として発表したい考えである。これらの資料においてとりわけ重要なのは、ナチス・ドイツの迫害を逃れて米国に亡命した分析家たちが、それ以前のヨーロッパで精神分析がどのように行われ、その周囲にどのような人々が集い、彼らのあいだでいかなる活動が行われていたかについて、ときに生々しい証言を行っている点である。当然のことながら、サブテーマ 2, 3, 4, 8 にかかわる情報も、散発的ながら、豊富にもたらされる。たとえば、1950年代にニューヨーク精神分析協会の中心人物のひとりとなる E・ヤーコブゾーンが、ベルリン時代を振り返り、同僚のあいだの社会主義運動や、その後自らの身にも降りかかるユダヤ人迫害、さらには、ドイツ脱出を挙行するときの緊迫したクロニクルを語ったインタビューは、それだけでも、本邦に紹介される価値があるだろう。

研究期間内に集中して取り組んだもうひとつのサブテーマ群は、上記 5 および 6 から成る。これらは、2011年に人文科学研究所でスタートし、2013年からは科学研究費の助成を受けて進められた共同研究「ヨーロッパ現代思想と政治」(科研費題目「現代思想と政治」)において本研究研究代表者(立木)に割り当てられた課題とタイ・アップして進められた。主な成果は、サブテーマ 5 については、雑誌『思想』(2015年1月号)に論文「マルクスに回帰するラカン」として発表され、サブテーマ 6 については、上記共同研究の成果報告書として目下編集集中の論集に、「ラカンの 68年5月 精神分析の政治の季節」のタイトルで掲載されることが決定している。前者は、本研究の一環として 2012年10月に招聘したフランスの精神分析家ピエール・ブリュノの京都での講演「症状、主体の分裂、資本主義のディスクール」の解題も兼ねるが、この講演(『思想』の同じ号に翻訳により掲載)とともに、ジャック・ラカン自身がマルクスに最も接近した時期の理論的成果に注目し、そのエッセンスを抽出したものである。他方、後者は、ラカンが自らの学派において推進した精神分析家育成制度の改革が、フランスにおける 68年5月の社会的動乱に密接にリンクしており、それはもちろん偶然の産物ではなく、ラカンによって明確に意識され、望まれさえしたことであることを証明する論考である。この制度改革の中心となった「パス」というシステム(従来の教育分析家に匹敵する、学派に教える役を担う分析家を認定する制度的仕組み)は、精神分析家とし

てプロフェッショナルな経験を積んできた従来の有資格者に代わって、自らの精神分析を終えたばかりで、まだ分析家としてはほとんど活動していない主体に、学派のもっとも重要な職務を担わせることを可能にする。この発案に、ラカン学派の古参の分析家たちは強く反対したが、ラカンは自らの学派にやってきたばかりの若者たちをつうじて、68年5月のエスプリを学派内に吹き込ませることで、この改革を断行したのだった。そこには、同時代の中国で文革を進めた毛沢東の姿が重なる。実際、当時を知る分析家のひとり、後にラカンの後継者となるジャック＝アラン・ミレールは、パスを通じたラカンの改革には、紅衛兵を通じた毛の精神に通じるものがあると証言している。このミレールも含め、当時ラカンのもとにいた多くの若者が、68年5月を経てマオイスト組織「プロレタリア左派」に合流するのは、けっして偶然ではなかったのである。なお、この論文には、研究期間内にフランスおよび米国で収集された本邦未公開の資料がふんだんに引用されている。また、これらのサブテーマ(5, 6)および、サブテーマ7については、もう一方のサブテーマ群の一部とともに、目下準備中の著書において、より充実した成果を発表する予定である。

<参考文献>

MILLER, Jacques-Alain, Politique lacanienne 1997-1998, EURL Huysmans, 2001

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

立木康介、00年代のラカン派、ジャック・ラカン研究、査読有、第9/10号、2012、34-51

立木康介、同一化 愛と死と、精神分析的心理療法フォーラム、査読有、第1巻、2013、49-60

TSUIKI, Kosuke, Amour en anamorphose – l'amour courtois et l'amour fou,I, PSYCHANALYSE, 査読有, 29, 2014, 63-79

TSUIKI, Kosuke, Amour en anamorphose – l'amour courtois et l'amour fou,II, PSYCHANALYSE, 査読有, 30, 2014, 89-100

立木康介、マルクスに回帰するラカン(1966-1973)、思想(岩波書店)、1089号、2015、21-39

[図書](計2件)

立木康介、河出書房新社、露出せよ、と現代文明は言う、2013、301

立木康介(編著)、中公新書、精神分析の名著、2013、370

[その他]

ホームページ等

<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/zinbun/>

[members/private/tsuiki_list.htm](http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/zinbun/members/private/tsuiki_list.htm)

6. 研究組織

(1)研究代表者

立木 康介 (TSUIKI Kosuke)

京都大学・人文科学研究所・准教授

研究者番号：70314250